



防災と日々の心のつながり

校長 田屋 多恵子

長い夏休みが終わって明るい笑顔が学校に帰ってきました。一段と逞しくなった子どもたちが、生き生きとした瞳を輝かせています。

ところで、9月1日は「防災の日」です。関東大震災や平成23年3月の東日本大震災が、わたしたちに様々な教訓を与えてくれています。わたしたちは経験に学び、これらの痛ましい犠牲を無駄にすることなく学校・地域などで防災計画に真剣に取り組んでいます。また、学校では、在校中における地震発生に備え、迅速かつ的確な活動ができるように次のような訓練をしています。

- ・ 防災意識を深める教育活動（防災の日の意義・安全教育）
- ・ 避難訓練（第一次避難・第二次避難）
- ・ 職員対象訓練（防火シャッター・避難用具操作など）



横浜市でも、東海地震（M7.96）・南関東地震（M7.9）・横浜市直下地震（M9）を想定し初動体制応急体制を策定しています。学校施設は、大規模震災発生時の避難場所や地域の救助・救援活動として拠点の役割をもつ「地域防災拠点」として指定され、非常時、被災された人たちの収容や情報の伝達収集などを行う場となります。横浜市が平成16年の調査をもとに公表した横浜市地震被害想定では、大地震が発生した場合の建物崩壊における想定死者数が市全体で 3,653 人となっています。恐ろしいような数字です。このようなことはあってはなりません。どうすれば少しでも被害を小さくし避けることができるかと考えると、大震災などの災害時の混乱した中では、お互いがお互いを思いやる人間関係が、思いがけず大きな事故を未然に防ぐ力となって働いたことは報道などでご承知の通りです。

以前、雲仙普賢岳の近くに立ち寄ることがあり、その時まだ噴煙を出している火口の位置が見えました。当時噴火が起こり始めた時、近所の方が声を掛け合うことでいち早く安全な場所に多くの人が避難できたという話を聞きました。正しい情報をつかむこと、そして地域に住む人たちが協力して避難することが重要なことだと強く感じました。これは東日本大震災などにおいてもいえたことで地域のつながりが緊密なほど被害が少なく、立ち直りも早かったようです。自分の身は自分で守るという基本的な姿勢はもちろんですが、その上に心のつながりを大切にした地域防災も大切だと思います。そのためには、隣り近所の助け合いなど地域での関わりがとても重要です。ご家庭でもこの9月1日「防災の日」をよい機会として、緊急時の連絡方法や防災に関する実際的な訓練や対応の仕方についてお考えいただき、家族で話し合っただけであればと思います。備えあれば憂いなしです。